

聖書:エペソ人への手紙2章11~22節

説教:二つのものを一つのからだとして

はじめに

パウロは、いまのトルコの西海岸に位置する港町であったエペソで福音を語ったことで救われる人が起こされ、やがて教会が建て上げられてまいります。しかしエペソ教会の歩みがすべてが順調だったというわけではない。教会が建てられていく最初の頃、使徒たちでさえ救われるのはイスラエル民族だけであると思ひ込んでいたくらいで、異邦人も救われると気がついたのはしばらく経ってからでした。それほどイスラエル民族と異邦人との間には大きな意識の差があったということで、これが後々教会の中で問題を起こす火種となります。たとえば「異邦人も割礼を受けるべきである」とか、「異邦人も律法を守るべきである」と主張するユダヤ人が出てきて教会が混乱していった。この手紙もそうですが、新約聖書を読む時はそのような背景があったことを頭に入れておくとよいと思います。

## 1 争いと対立

### 1) なぜ

そこで今日の箇所になりますが、ここに「平和」「和解」「敵意」というようなことばが出てきます。そのことでだれもが思い起こすのは、毎日のニュースで報道される戦争のことでしょう。その報道を見たり聞いたりするたびに私たちは祈ります。「一日も早く戦争が終わって、この地上に平和が実現し、戦争で人が死ぬことがないようにしてください。」そんなふうに祈りながら、どうして戦争が起きるのだろうか考える。テレビを見ながら、「あの国の大統領が悪い」とか「もっとこうすべきだ」とか、いろいろなことを言う。では聖書は戦争についてなんと言っているのでしょうか。この箇所は、肉の割礼を受けていたユダヤ人と割礼を受けていない異邦人、この二つのグループの間にあった争いのことが直接のテーマで、戦争の話は出てこない。けれどもよく見ていくと、ユダヤ人と異邦人が対立するのも、民族と民族が戦争をするのも、つきつめていけば、どちらも根にあるものは同じだということがわかってきます。

### 2) 隔ての壁

ではその根本にあるものは何か。14節から16節を読みます。「実に、キリストこそ私たちの平和で

す。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

二つの間に「敵意」という「隔ての壁」がある。これが対立や争い、そして戦争を生み出す根本の問題である。これはだれもが納得するでしょう。戦争を始める時、国の指導者は必ず言う。「やつらは非常に悪い敵である。だから自分たちを守るために戦わなければならない。」

敵意とか隔ての壁ですが、これは戦争だけではない。私たちの身の回りにたくさんあります。例えば、結婚している方なら配偶者のことを考えてみてください。愛して結婚したはずなのに、あのことでだんだんと不満がたまり、そのうちに口もきかなくなると相手は何を考えているかわからなくなる。そんなふうにして、いつの間にか二人の間に隔ての壁が出来上がり、西と東に分かれて冷たい戦争をしている、というようなことがあったりする。テレビ新聞を見て、戦争が終わって平和が来ますようにと祈りながら、夫婦の間には見えない戦争が続く。なんとも複雑です。一体どうしたらよいのか。

ある年代以上の方は、かつてドイツには「ベルリンの壁」というものがあって、その壁を隔ててドイツが西と東に分断していたのを記憶されているでしょう。あの壁が当時の東と西の冷戦の象徴となっていて、まさか壁がなくなるとはほとんどだれも予想していなかった。ところが1989年にあっという間に崩されて、世界中が驚いた。

夫婦の間に立ち塞がる隔ての壁も、ベルリンの壁のようにいつか崩れればと願うのですが、本当に崩れるとはどうしても思えません。また仮に壁が崩れたとしても、それで問題が解決するのか。そこも確信が持てない。ベルリンの壁はどうか。確かに壁は崩れ、やがてソ連は崩壊して冷静は終わりました。ではそれで世界は平和になったのか。ご存じのとおり、答えはノーです。新たな戦争が起きている。結局人の手では根本の解決ができなかった。夫婦の間を隔てる壁についてもお

そらく同じでしょう。人の手によって解決するにはどうしても限界がある。

## 2 キリストの十字架

### 1) 肉によって敵意を滅ぼす

ではどうしたらよいのか。14節をもう一度読みます。「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊しました。」キリストは、敵意と読ばれる隔ての壁を打ちこわしてくださり、平和をもたらしてください。だから、キリストこそ私たちの平和である。言っていることはシンプルです。ここで注目したいのは、ではどのようにして隔ての壁を壊したのかです。

「ご自分の肉において」とあります。イエス・キリストが十字架でご自分のからだを献げてくださったことですね。神の子である方のからだ、肉が裂かれて血が流された。それで隔ての壁である敵意が打ち壊された。

それはよいとして、ひとつ疑問が残る。イエス・キリストの肉と敵意、この二つの事がらにいったいどんなつながりがあるのか。全然関係ないようにも見えます。そこで考えたいのは、いったいだれとだれとの間にあった敵意のことかです。もちろんお互いに憎み合っている私たちのことを指しているのは明らかですが、それだけなのか。もう少し深めてみましょう。

## 2) 敵意

### ①人が神を憎む

結論から言えば、敵意には二つの意味が込められています。一つ目は、人が神に向けて敵意をもつという意味。前回の所で触れたように、私たちはかつて救われる前、自分の背きと罪の中に死んでいて、自分の欲のままに生きていて、神の御怒りを受けるべき者だといわれていました。自分の欲を満たすことが何よりも一番ですから、それを邪魔するものは神であれ憎みます。クリスチャンになったら不自由になる。そんな理由をつけて、神のほうには行こうとせず、かえって神から遠ざかり、私たちのほうが神を敵とみなしていました。これが敵意の一つ目の意味。

### ②神が罪人に怒りを燃やす

そして敵意の二つ目の意味。今度は神が人に向けて敵意をもつという意味。私たちは神を捨てて神を敵に回したわけですから、正しい方である神は御怒りをもって私たちをさばかなければなりません。それが敵意です。さばくと聞けば、神はなん

と厳しいのかと聞こえるかもしれませんが。でも悪いことをして悔い改めもしないで、なお悪さを繰り返しているどら息子がいたら、親はどうしますか。みな怒る。怒らないほうがおかしい。怒りのことをここでは敵意と言ってる。そう思ってください。神の敵意があるために、私たちはさばきを受けて滅ぼされるしかない者でした。

### 2) 和解

ところが、あわれみ豊かな神は、神に背き罪を繰り返していた者たちをも変わらずに愛してくださいました。敵意をもっていたのに、なお愛する。考えてみればこれほど矛盾した話はない。本当に神は私たちを愛しておられたのか。どうしてそんなことがわかるのか。第一ヨハネ3章16節にこうあります。「キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。」

私たちが何かをしたから神が愛して下さったのではありません。なお罪を犯し続けていたその真っ最中に、神の方から私たちのところに来てくださり、十字架でご自分のいのちを捨てて下さった。それを見て、神は罪ある私を愛して下さっているとわかった。神と私たちの間にこのような敵意があったけれど、神のほうから、隔ての壁である敵意を打ち壊して下さった。だから私たちは安心して神と和解することができる。その和解の場所こそがキリストの十字架なのだということです。

## 3 二つを一つのからだとする

### 1) 新しい一人の人

では、神と和解することができたとして次に何が起こるか。15節後半から16節前半。「こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとした。」敵対して憎み合っていた二人が、こんどは新しい一人の人につくりあげられ、そこに平和が実現していく。それはまるで二つのからだの一つのからだになるようなものだというのです。「ひとつのからだ」、たとえとしてちょっと極端ではないかと思われたかもしれない。

パウロがこのような表現をしたのには、旧約聖書の背景があります。最初の人アダムのところへ妻となるエバが連れて来られた時のことを思いだしてください。あのときアダムは「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。」と歌いながら喜びます。罪を犯す前の夫婦はどんなふうになるの

か。創世記2章24節にある。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」このことが頭にあって、パウロは一つのからだと表現したのです。けんかしている夫婦であろうが、対立している民族や国家であろうが、キリストは二つのものを一つのからだのように新しく造り上げる力を持っている。キリストがふたりを隔てている壁である敵意を打ち壊して下さったのだから、やがてあなたがたも和解して一つのからだとなることができる。どんなに壊れかけた夫婦であっても、キリストの十字架に希望があるのだと言ってください。

## 2) 神の御住まいとなる

このようにひとりの新しい人に造り上げられたとして、ではその先にどんな世界が広がるのか。21、22節。「このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」私たちがもし神と和解ができたなら、私たちのからだの主にある聖なる宮となり、神の御住まいとなる。驚くべきみことばです。戦争が絶えない世界に対して、私たちのからだを通して神が働いてくださると言うのです。

でもどうでしょうか。そんな実感が皆さんあるでしょうか。キリストを信じて救われたはずなのに、まだあの人この人と和解していない。そういうことがたくさんある。そう思うと自分が神の御住まいになるとは到底思えません。

だからこそ、キリストのからだに裂かれ、そこで流された血潮がどれほどの力を持っているのかをもういちど考えていきたいと思うのです。この戦争の絶えない世界に主にある平和をもたらすことのできる力があると言われます。私たちの間に争いがあつたとしても、主にあつて和解する日が来ることを信じたい。そのことを祈りながら歩んでまいります。